

## ミソドラマを用いた葛藤の解決

講師 コンフリクト・マネージメント・ミソドラマ研究所所長 アラン・グッゲンビュール

2001. 7 .27

危機介入についてお話をしたいと思います。実際に学校で問題が発生し、危機介入を要請されたときにどういうふうに対応しているかということ、その予防も含めてお話をしたいと思います。混乱状況にわれわれが介入する際に、なすべき大事なことはいくつかあります。介入のステップとしては、まず第一に先生との話し合い、第二に保護者との会合、第三に実際の学校訪問を専門家がやるということです。そして、第四段階で実際の介入が入ります。それは、グループワークが主になるもので、ここでは「ミソドラマ」がそのグループワークの手法になってくるわけです。それから、個別のカウンセリングが必要な場合にはそれが展開されますし、最終的な介入がなされ、その成果を保護者にある意味では評価してもらい、どうなったかということを保護者と話し合うという、こうした段階になっています。

先生との話し合いがなぜ第一に重要かということ、先生方がどういうふうの問題に取り組み、何ができて何をどうしようとしたのか、どこに困難があるかということ十分に話し合うということがまず大事なわけです。第二の保護者の会合というのはいろんなケースによってそれほど決定的でない場合もありますが、大事なことは全生徒の親に集まってもらう、全部集まるかどうかは別にして、そう呼びかけることが大事です。そしてそのときに召集をかけた側が最初に言うべき非常に重要なポイントがあって、それは、開口一番、こういう問題でわれわれは専門家を要請したと明言することです。これは教師にとっては非常に困難なことです。保護者と共同するためにはそのせりふを持ち出すことが、実は保護者に協力的になってもらうためのひとつの糸口となるのです。ですからそのことは非常に重要です。また、何か特定の問題がある子どもやその保護者あるいは先生だけを抜き出して扱うのではなく、グループで全体として介入していくということにもポイントがあります。これは従来の個別カウンセリング主体とは大きく異なる手法です。

全体の期間は3、4ヶ月の介入プログラムです。最初の親の会合には先生たちは出席しません。親からは先生や学校に対する不満、怒りがたくさんできてきて、それを

専門家としてはまず聞いていく、受け止めることが最初のステップに非常に大事なことです。多くの不満がでるわけですが、その後で、ではみなさん、みなさんの子どもさんが安全に学校に通い続けるということに、その方法にわれわれと一緒に取り組みますかどうですか、一人でもノーと言えばこの先すすみませんということを宣言し、ここで確認をとって次に進むということが非常に重要になってきます。われわれがこれをすすめていくにはみなさんの協力が必要なんだということで、そこのせめぎあいがこの時点で行われるわけです。そういうせめぎあいをしながら、実際に、お母さんがたお父さんがた、ご自分の子どもさんをこの学校でどう生活させたいんですか、われわれはこういうことを達成しようと思いがすが、と契約のつめをやっていくわけです。そして、正確な診断が大事になるわけですが、そのために学校を実際に訪問してその学校の建物の様子とか、地域の状況、それを写真にとって、学校全体をアセスメントする。個々の子どもや問題を起こしている生徒、あるいは問題を抱えている先生だけでなく、学校全体の状況を把握するということが重要です。

第四のステップである実際の介入になっていくわけですが、回数は3回ないし4回ということで、場所は特別教室のような大きな場所に生徒を集めて、そこに先生がいない状況で進めます。実際のミソドラマの介入になっていくわけですが、これまでどういふステップがあって、なぜここにきたかということを生徒が全部集まっているなかで説明してスタートします。それに対して、当然のことながら「俺たち何も悪いことやってないぞ」というふうな、無実だという子どもも出てくるわけですが、そういう子どもに対して「そうだろう。じゃあそれをちゃんと証明して見せてほしい、それを聞くから。先生たちも協力してくれるし、君たちに問題がないということを保護者の方にもわかってもらえるように手伝うんで見せてくれ」という形で入ります。

そして、5分から10分のウォームアップの練習をやって、ここから中心的な部分になるわけですが、そこでお話を始めます。そのお話は、事前のアセスメントに沿っ

て、この学校とそのクラスが抱えている問題の中核にある問題、前提におそらく生徒たちがしているだろうと想定される内容を含んだ話を選びます。その話は整然としたお話ではなくて、何か奇妙な、論理の飛躍とか何か話をあべこべにしたようなわけのわからない話です。つじつまが合わないような話なんです、そのなかにメンタルムーバー—何らかの心が動いてしまうといいますか、おかしいんだけど、何か原動力になるような内容を含んだ—を埋め込みます。その話を進めながら、あるところで話をとめます。この先みんなどうなると思う？というふうにして下駄を預けて、この話の結末を想像させます。この時点で、ファンタジーをそれぞれ描かせて、サブグループに分けます。そしてそのグループごとにこの話の結末がどうなるか話し合いをさせます。

それぞれいろんな話がグループのなかでもできるわけですが、一応グループとして、自分たちのグループはこういうことにしようという同意を得るまでやります。ファンタジーですから現実ではない、勝手にお話を作っているだけですが、サブグループのあししようこうしようという中で、実はグループの関係がそのなかに反映されて話の結末が決まっていき、そういうフィクションのレベルで話し合っていることが実は生徒やそのクラスが抱えている問題とだぶったかたちでエンディングが作られていくわけです。そして、そこで作った話を実際にドラマとしてやってもらいます。一つのグループがやっているのを他のグループは観客として見ます。話を実際ドラマに変えて、それをお互いに紹介します。生徒たち自身が作ったその話の結末の部分に、実は彼らが抱えている問題にかかわる非常に重要な情報が埋め込まれているんです。物語の結末とみんなが抱えている問題との結びつきを確認してもらったうえで、実際にではどこを変えられるのか、物語の結末というのは何らかの解決を含んでいるわけですが、自分たちが作り出した解決策を使って、自分たちが抱えている問題のどこをどう変えられるか、変えられそうなところを話し合うというふうに具体化させるわけです。

生徒同士が話し合っているわけですが、その内容には当然先生のことに関わっているわけですし、内容によっては親のことに関わっているということで、生徒だけではなくて、教師、保護者のなかで同じようなプロセスが進行しなければ実は解決にならないわけです。ここではフィクションとして話していることは必ずしもそれぞれの生徒がおかれている実際の状況とは違っているところがたくさんあるわけですから、現実には何があってどうかということそのなかに入れて整頓していかなくては

いけないということが残っています。例えば、友人関係が問題になってそこでいろいろいざこざが起こっている、学校に行くまでの間に殴られるとか、そういうことが問題になっている場合に、どういうふうに状況を改善するかということで、作られた話とその直面している友人関係の問題の解決とを結びつけます。こういう話し合いをすることによってエンパワーメントされる、何か自分たちができたというある合意形成ができた、具体的にこういうことが変えられる、そういうプラス思考の方向に自分たちが徐々に動き出したことを実感していますので、そのことがエンパワーメントになってくるわけです。まず最初に生徒のなかでそういう内的な変化が起こっていく、しかもグループワークとしてそれが浸透することが大事です。

この3、4回の生徒とのセッションですが、その間隔は一週間、もしくは二週間ということで、状況に応じて長さを決めていきます。たとえば1、2週間たっても状況に変化がない、いじめとか問題が続いているという場合に、先生も保護者もこういう変化があるのに君たちは何の変化もない、俺たち悪くないという話だったんだから、ちゃんとそれが証明する必要があると思う、何か証拠を示そうというように、生徒に迫ります。生徒たちと3、4回続けたあと、生徒にとってはブレイクになるわけですが、このカウンセリングは2ヶ月間、先生とだけカウンセリングをやります。介入する専門家のほうは、十分に学校の状況について情報を得ていますので、その得た情報とともに先生たちが抱え込んでいる悩みとか今までやったこと、それをつき合わせながら相談を進めていくことになります。

そして、最終段階の介入になってくるわけですが、ここで再び生徒のクラスにいて、行った状況にどういの変化が起こったか、最初語り始めたところから、3ヶ月ぐらいうでに経っているわけですから、どういの変化があったかどうか、どこが変わったところかということをして照会し、最初の時期と現在との明確な差を生徒に求めて、あそこが変わった、ここが変わったということ聞き取るわけです。この最終段階で保護者に集まってもらいます。そして、この3、4ヶ月のかかわりを通じて、この学校でみなさんが子どもさんたちについて何ができたか確認しましょうとあって、確認していきます。ちゃんと契約したことができたかということ当の問題を抱えて悩んでいる親御さんたちに確認してもらうということです。ここでは先生やスクールカウンセラーが同席して、経過がどうなったかについて確認をし、専門家はここで介入をストップして引き上げます。そこに教師、スクー

ルカウンセラーが戻ってこの学校を運営していくわけですから、自分たちはどうするかという話し合い、最終的にこういう介入がうまくいったかどうか、ここで再確認させるわけです。

危機が起こって介入としてこれを3、4ヶ月やっています。そういう事件がその学校で全く起こってなくても、予防のためにこのミソドラマをやることも重要です。そのためには丸一日ですとか、二日、一日半とかいう期間を通じて、問題が起こっていないクラス、

学校でも予防としてミソドラマを生徒とやっていく、あるいは教師集団とやるということになります。やり方についてのマニュアル、テキストがありますので、それを先生たちに提供して、一日、二日の講習会の後は、先生たちは自分たちでテキストを参考にしながら、今度は自分たちでこれをさらに研修を積んでいくというようなことをやってもらいます。そういう予防策としてもこのミソドラマは有用であると考えられます。